

アーツカウンシル東京 ブリティッシュ・カウンシル 共催

オープンフォーラム

# オリンピック・パラリンピックと文化プログラム - ロンドン 2012 から東京 2020 へ -

2014 年 2 月 15 日

## 報 告 書

### 目 次

|                                                                                                                                                                                         |    |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| 1. はじめに/開催概要                                                                                                                                                                            | 2  |
| 2. パネリスト プロフィール                                                                                                                                                                         | 3  |
| 3. 挨拶<br>福原 義春<br>東京芸術文化評議会 会長/公益社団法人企業メセナ協議会 会長                                                                                                                                        | 4  |
| 4. オリンピック・パラリンピック招致と東京都の文化政策<br>吉本 光宏<br>東京芸術文化評議会 文化都市政策検討部会 部会長/<br>株式会社ニッセイ基礎研究所 主席研究員                                                                                               | 6  |
| 5. プレゼンテーション<br>ルース・マッケンジー<br>ロンドン 2012 カルチュラル・オリンピアド ディレクター/<br>ロンドン 2012 フェスティバル キュレーター<br>モイラ・シンクレア<br>アーツカウンシル・イングランド エグゼクティブ・ディレクター (ロンドンおよび南東地域担当)<br>ジャスティーン・サイモンズ<br>ロンドン市 文化部長 | 10 |
| 6. 質疑応答 + パネルディスカッション                                                                                                                                                                   | 25 |
| 7. 挨拶<br>ジェフ・ストーリーター<br>ブリティッシュ・カウンシル駐日代表                                                                                                                                               | 34 |

## はじめに

アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）とブリティッシュ・カウンシルは、2014年2月15日（土）にオープンフォーラム「オリンピック・パラリンピックと文化プログラム——ロンドン2012から東京2020へ」を開催しました。

オリンピック憲章では「スポーツを文化と教育と融合させる」ことをオリンピズムの目指すものとしており、大会開催時には、スポーツ競技だけでなく、並行して「文化プログラム」を開催することが義務づけられています。

2012年のロンドン・オリンピック・パラリンピック競技大会では、文化プログラムの役割が特に重視され、大会の4年前から開始された多様なイベントに英国国内外から多数の観客やアーティストが参加し、大変な盛り上がりを見せました。

そこで、このフォーラムではロンドン大会における文化プログラムのキーパーソンをお招きし、文化プログラムの企画・運営、課題、成果などをお話しいただくとともに、2020年の東京大会の文化プログラムの具体化に向けたビジョンを探りました。

### 開催概要

- 日 時： 2014年2月15日（土）13:30-16:00
- 会 場： 東京国際フォーラム ホール D5
- 主 催： アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）  
ブリティッシュ・カウンシル
- 言 語： 日英同時通訳
- 動画配信： ライブ配信及びアーカイブ化
- 参加者数： 161名

|             |                                                                                                              |
|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 13:30-13:45 | <b>挨拶</b><br>福原義春（代読：三好勝則）                                                                                   |
| 13:45-13:55 | <b>オリンピック・パラリンピック招致と東京都の文化政策</b><br>吉本光宏                                                                     |
| 13:55-15:10 | <b>プレゼンテーション</b><br>ルース・マッケンジー<br>モイラ・シンクレア<br>ジャスティーン・サイモンズ                                                 |
| 15:10-15:15 | 会場準備                                                                                                         |
| 15:15-15:55 | <b>質疑応答 + パネルディスカッション</b><br><br>【パネリスト】<br>ルース・マッケンジー<br>モイラ・シンクレア<br>ジャスティーン・サイモンズ<br><br>【モデレーター】<br>吉本光宏 |
| 15:55-16:00 | <b>挨拶</b><br>ジェフ・ストリーター                                                                                      |

## パネリスト プロフィール

### ルース・マッケンジー (Ruth Mackenzie)

ロンドン 2012 カルチュラル・オリンピアド ディレクターおよびロンドン 2012 フェスティバル キュレーターとして、25,000 人のアーティスト、2,000 万人以上の観客が参加した英国史上最大規模のアートフェスティバルを成功に導いた。現在アムステルダムで国際的に著名な芸術祭「ディジグネート・オランダ・フェスティバル」の芸術監督を務めるほか、英国 BBC とアーツカウンシルによる新しいオンライン上のアートプラットフォーム「ザ・スペース」のディレクターも兼任。過去には、マンチェスター国際フェスティバルやスコティッシュ・オペラのジェネラル・ディレクター、チチェスター・フェスティバル・シアター芸術監督、ノッティンガム・プレイハウスのエグゼクティブ・ディレクター、サウス・バンク・センターの戦略企画部門長などを歴任。現在ウィーン・フェスティバル、BBC、テート、ロンドン交響楽団、ブリティッシュ・フィルム・インスティテュートなどのコンサルタントや、英国文化メディアスポーツ省の 5 人の大臣のアドバイザーも務めており、BBC やアーツカウンシル・イングランド、インペリアル・ウォー・ミュージアム、ブリティッシュ・カウンシルとのプロジェクトにも携わっている。

### モイラ・シンクレア (Moir Sinclair)

アーツカウンシル・イングランドのエグゼクティブ・ディレクターとしてロンドンおよび南東地域を担当し、この地域で助成を受ける 322 のアート団体の活動や運営状況などを統括。また、アーツカウンシル・イングランドのボードメンバーとしてイングランド全体の政策策定に携わり、特に文化セクターの成長と人材育成を担当。2012 年のロンドン・オリンピック・パラリンピック競技大会に大きく貢献し、現在もその成果を今後につなげていくレガシー・プログラムを担当している。

マンチェスター大学で演劇を学んだ後、地方自治体やパフォーミング・アーツなどの仕事に携わり、その後、病院患者などを対象にアートプログラムを実施するバイタル・アーツのディレクターを経て、2005 年よりアーツカウンシル・イングランドに所属。2004 年度には、英国の文化セクターで今後の活動が期待される人材を対象としたクロア・リーダーシップ・プログラムに参加。現在、障害をもつ人々やホームレスの人々などをサポートする団体ルック・アヘッド・ソーシャル・ケア・アンド・ハウジングの活動にも副理事として関わっている。

### ジャスティーン・サイモンズ (Justine Simons)

11 年間ロンドン市長の文化部長を務め、現在は文化担当の副市長代理も兼任。ロンドン市長の文化戦略の責任者として、映像・ファッション・デザイン分野といったクリエイティブ産業への投資プログラムを主導している。ロンドン市が関わる音楽、演劇、国際文化交流、視覚美術、文化政策、パブリックアートといった事業を統括するほか、ロンドン市長が推進するトラファルガー広場を舞台にしたパブリックアートプロジェクト「フォース・プリンス (四番目の台座)」のディレクターも務める。2012 年のロンドン・オリンピック・パラリンピック競技大会では、ロンドン市の責任者として、またロンドン・フェスティバル 2012 のアソシエート・クリエイティブ・プロデューサーとして、文化プログラムの企画から実現まで中心的な役割を果たした。また、文化と都市の未来を世界規模で考えるワールド・シティーズ・カルチャー・フォーラムも立ち上げ、人々の生活や政治における文化の重要性を訴求している。現職に就く前は、コンテンポラリー・ダンス分野でいくつかの主要な劇場で 10 年間働いた。現在はテムズ・フェスティバル、英国フィルム・コミッション、ロンドン・デザイン・フェスティバル、ブリティッシュ・ファッション・カウンシルなどでボードメンバーを務めるほか、ビッグ・ダンスの理事長でもある。

### 吉本 光宏 (よしもと みつひろ) モデレーター

1958 年徳島県生。早稲田大学大学院修了 (都市計画) 後、社会工学研究所などを経て 1989 年からニッセイ基礎研に所属。文化施設開発やアートワーク計画のコンサルタントとして活躍する他、文化政策や創造都市などの調査研究に取り組む。東京芸術文化評議会文化都市政策検討部会部会長、(公社) 企業メセナ協議会理事などを歴任。主著に「アート戦略都市 (監修、鹿島出版会)」など。

東京芸術文化評議会 会長

公益社団法人企業メセナ協議会 会長

## 福原 義春

(代読：アーツカウンシル東京 機構長 三好勝則)

「オリンピック・パラリンピックと文化プログラム」のオープンフォーラムが、アーツカウンシル東京とブリティッシュ・カウンシルの共催により開催されるにあたり、東京芸術文化評議会の会長として一言ご挨拶します。

昨年 9 月の IOC 総会で、東京は 2020 年のオリンピック・パラリンピックの開催都市に決定しました。オリンピックはスポーツの祭典であることは勿論のこと、「文化の祭典」でもあることを、2012 年のロンドン大会は、英国の歴史と誇りある民衆の文化の力で堂々と示しました。この優れた先例に習い、東京五輪においても文化の力を世界に披露し、成功を牽引すべきです。

ロンドン、パリ、ニューヨーク、あるいは東京のようなメガシティの文化力は、その国の文化を象徴するものです。東京では連日連夜、世界のシンフォニーオーケストラが結集し、世界の名画も至るところで鑑賞できます。アニメや、おたく文化も海外に不思議な魅力を放っています。しかし、その影響力は膨大な情報量の中で埋没しがちで、膨大でつかみどころのない東京の文化をインパクトあるものまで仕立てられていません。印象派に影響を与えた浮世絵や、ユネスコ無形文化遺産に登録された和食・日本の食文化など、海外の人の方が日本の価値を分かっているのかも知れません。

2020 年の大会は、こうした都市力の源泉である文化のグレードを高め、国内外のアーティストとともに、洗練された都市の文化や日本人の品格をもってその実力を示す絶好の機会だと思います。

世界はいま、大きな変わり目にあると、感じているのは私だけではないと思います。世の中のあらゆる面で行き詰まり感を覚え、この先どう進んだら良いのか分からなくなっているのではないのでしょうか。これからの 10 年間、どんなスピードで何が起こるのかは、想像が付きません。私達は世界の大きな過渡期にいます。私達の生きる現代を、人類史上でも非常に稀な時代の節目であることを意識して、そのことを活かせば、稀有な経験ができるのではないのでしょうか。その意味で、今は幸運な時代なのかもしれません。その中で、いかに美意識を持ち、心豊かに生きるかが、私達一人ひとりに問われています。

予測不可能な次の 10 年を読み、ビジョンを描くには、何が必要なのでしょう。私は、「真の教養を得る」ことと、「見えないものを見る」ことが、ぜひ必要だと考えています。このうち、「見えないものを見る」感性は、実は本来、私達日本人に備わっていました。日本古来の文化を見れば、それがよくわかります。

社会も組織も劣化しつつあるいま、経済優位性さえも危ういものだとしたら、今後、何を基軸にして進んでいけばいいのか。それは、歴史と知恵の結晶である「文化」の力しかないと思うのです。国は文化というベースの上に政治や経済が成立し、初めて全体の力になるのです。私達は、そのことを理解し、もっと多様性を高め、絶対的な価値を創造できるよう文化力を高め、人間性を高めなければならないのではないのでしょうか。

私は企業人として、資本主義社会の原理にヒト・モノ・カネに「文化」を要素として加えることで、企業活動に多様性や活性化をもたらし、付加価値をもたらすことを提案してきました。経済価値の追求

だけでは、世界が動かない時代であることは誰もが気づいており、文化を機軸として新たなイノベーションを創造するためにも、東京大会では民の力を結集して取り組むことが重要です。幸い私が会長を務めている東京芸術文化評議会の提言により、東京には英国と同様に、民間の芸術文化活動を押し上げるアーツカウンシル東京を創りましたので、これを機能させ化学反応を起こすことにより、個々の文化力が融合した民間プロジェクトを展開することができます。

また、日本人は、もっと自信を持って自国の文化を誇るべきです。2020 年を一つの通過点に終わらせるのではなく、文化の生産現場にもっと創造性を発揮させ、新たな文化サイクルを創っていくという意味も含めると、文化活動をシステムとして捉えるとともに、次代を担う若いパワーを結集していくことが重要となります。そのことを通じて、オリンピックの歴史とともに、人間が人間として生きていくために、どうしても必要なもの、日本文化の持つ究極の美しさが、人々の心の中に本能的価値として刻まれるのではないかと。

さらにいえば、2020 年の東京大会を成功させるには、新しい知事を迎えた東京が先頭に立って頑張ることは勿論のこと、未だ震災の傷跡の残る被災地をはじめとして、日本全国が一体となって盛り上がるのが不可欠であり、そのために最も有効なツールが文化ではないでしょうか。

本日は、ロンドン大会における文化面での戦略的展開を、現場の最前線で指揮された3人の方をお招きいたしました。これからカルチュラル・オリンピックの具体化を進めていく東京として、その成功の秘訣やそれに至るまでの艱難辛苦などをご教示いただき、その先例に習いながら、日本の文化の力で、東京大会の成功を導いていきたいと思っています。

## オリンピック・パラリンピック招致と東京都の文化政策



東京芸術文化評議会 文化都市政策検討部会 部会長  
株式会社ニッセイ基礎研究所 主席研究員

### 吉本 光宏

今日は雪の中、皆様大勢お集まりいただきありがとうございます。今日はロンドンから3人のゲストをお招きしていますが、東京もオリンピック招致に向けてさまざまな文化政策を強化してきましたので、私から最初にそのあたりのことをご紹介しますと思います。

少し古い話になりますが、当時の石原知事がオリンピック・パラリンピックの招致を表明したのは2005年9月でした。ちょうどその頃、福原義春会長が座長をされる「東京の文化施策を語る会」からアーツカウンシルをつくろうという提言が出されておりました。そういうこともあって、翌年、東京芸術文化評議会が設置されております。その第1回目の評議会では既にオリンピックと文化プログラムのことが議論されました。

その後、2008年2月にロンドンから、当時オリンピックの文化教育委員会の最高顧問でありましたジュード・ケリーさんをお招きして、オリンピックにとって文化がいかに重要かというレクチャーをしていただきました。その後、評議会、部会でさまざまな議論をしまして、立候補ファイルの文化プログラムをまとめて提案したわけです。でも残念ながらこのとき招致はかないませんでした。

2011年、石原元知事は、「もう一回やるぞ」ということで立候補して、その後も評議会、それから部会においてさまざまな検討を行ってきました。その途中で、本日のフォーラムの主催者のひとつであるアーツカウンシル東京が設立されました。

そして2013年に「ディスカバー・トゥモロー」というスローガンとともに立候補ファイルを提出しました。その中に文化のパートがあります。ということが書かれていたかを少しだけご紹介します。

「日本文化は極めて豊かで刺激的である。何百年という伝統に深く根ざし、現代のトレンドの発信源として若者に影響を及ぼしている。東京を訪れる人は、革新的なファッションやデザイン、音楽、美食、現代美術を生み出す活気のある雰囲気魅了される。これらはすべて日本古来の伝統からインスピレーションを受け、伝統と調和している。私達は、訪れる人に特別な体験をしてもらうため、東京、日本、そして世界の文化から最高の要素を取り出し、独自のビジョンでもある『ディスカバー・トゥモロー』から発想を得たさまざまな文化プログラムを展開する」というような提案書でした。

オリンピックの前あるいはオリンピック会期中に行う具体的なプランも記載されています。東京文化発信プロジェクトを強化するとか、若手の芸術家を支援するとか、あるいは、大会期間中は都市全体を劇場にするとか。さらにロンドン大会で行われました「アンリミテッド (Unlimited)」という障害者のアートフェスティバルを東京は継承すると宣言しております。

その後、去年の9月に無事招致が決定したわけです。それまでの過程で東京の文化政策が強化され、さまざまな文化事業が行われてきました。

都立の文化施設については、まず、東京都美術館がリニューアルされて事業が強化され、新たな教育

プログラムも始まりました。池袋の芸術劇場に野田秀樹さんを芸術監督にお迎えしたのもこうした一連の流れで、その後リニューアルオープンしてプログラムが強化されております。東京都庭園美術館、東京文化会館、東京都写真美術館、東京都現代美術館、江戸東京博物館と、これだけ並べてみると、東京都は国立級の文化施設をこんなに運営しているのだということに改めて気づかされますが、オリンピック招致に向けて、これらをリニューアルして事業を強化するということを東京都は着実にやってきております。

それから、もうひとつ、オリンピック招致に向けて立ち上げたユニークな事業が、「東京文化発信プロジェクト」と呼ばれるものです。現在、大きくはフェスティバル、子供や若者向けのプログラム、それから「東京アートポイント計画」という地域の NPO と協働するプログラム、そして国際会議などを行うネットワークという 4 つの柱で行っております。ここに 2013 年度まで実施してきたものの簡単な年表をつくったのですが、年々数が増えて内容も質も充実してきました。【図 1】

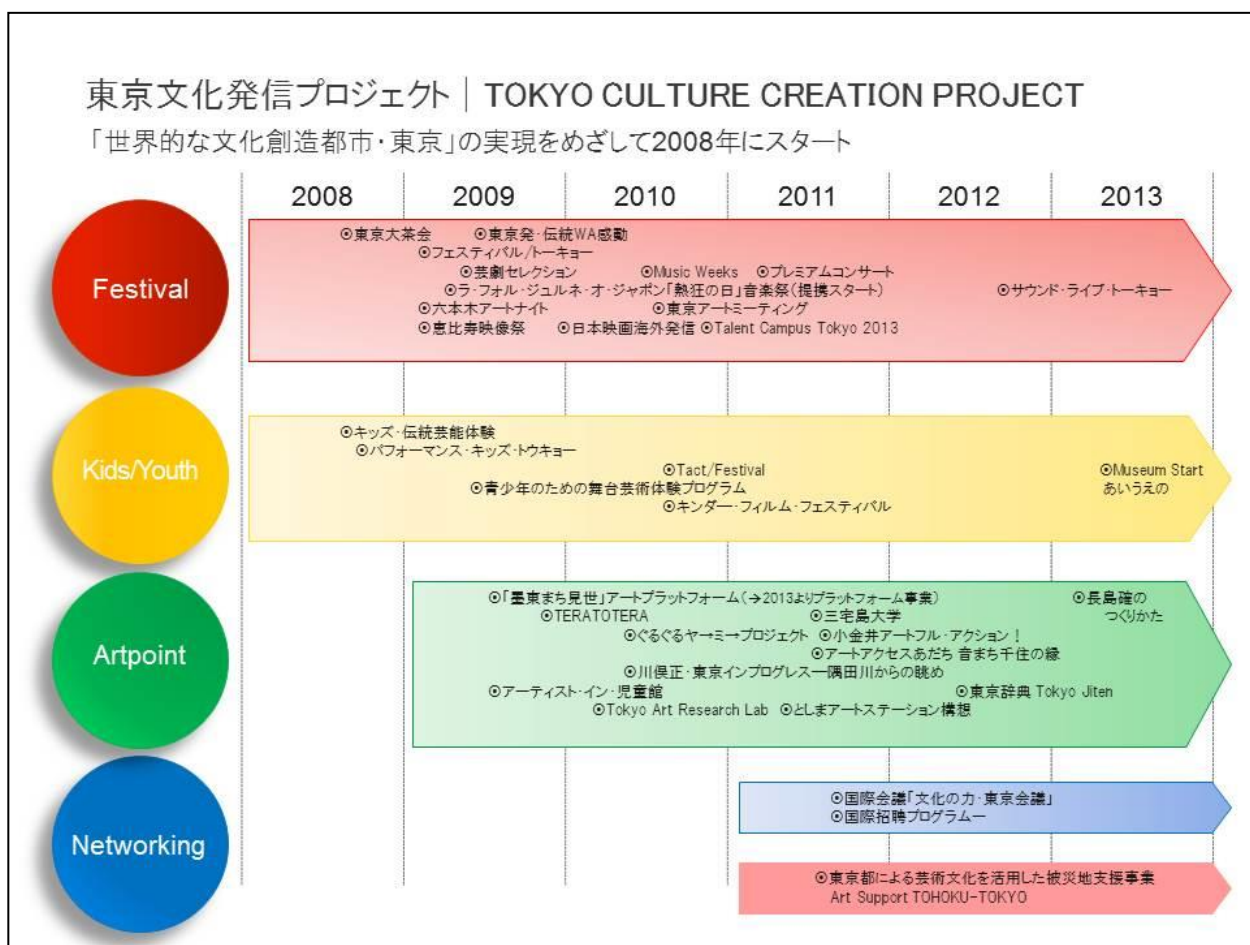


図 1

いくつか代表的なものをご紹介します。たとえば、「東京大茶会」というイベントでは、「イングリッシュ野点」というプログラムを行っています。外国人の方にもお茶を楽しんでもらおうと、フェスティバルの一環として行われたものです。【図 2】

それから「六本木アートナイト」という、森美術館、国立新美術館等、六本木にあるアート拠点がオールナイトで行う催しがあり、「フェスティバル/トーキョー」という日本で最大規模の舞台芸術のフェスティバルも始まりました。他にも「恵比寿映像祭」や、音楽系のコンテンポラリーな取り組みも行われております。【図 3】

子供向けのプログラムでは、「パフォーマンスキッズ・トーキョー」という子供達がアーティストと一緒にワークショップをして作品をつかって公演を行うものがあります。また「キッズ伝統芸能体験」では、伝統芸能を子供達が学んで能楽堂で公演をするということも行われております。【図 4】

そして、「東京アートポイント計画」というプロジェクトがあります。これは、実は 2016 年のオリンピックの立候補ファイルに、「千の結び」という文化プログラムを提案したことが起源となって誕生したものです。大きな文化施設ではなくて、東京の各地域で NPO と組んで多様な地域展開のプロジェクトが展開されています。【図 5】



図 2



図 3



図 4



図 5

ではここで、ロンドン大会の話をさせていただく前に、オリンピックと文化プログラムというものがどういう歴史を辿ってきたかということ、簡単におさらいをしておきたいと思います。

オリンピックは 1896 年、第 1 回大会のアテネからはじまり、4 回目（1908 年）はロンドンだったわけですが、そのときは文化プログラムはありませんでした。その後、ストックホルム（1912 年）からは芸術競技として文化プログラムが始まりました。スポーツをモチーフにした芸術作品が出品され、競われてメダルが授与されたと聞いています。

その後、1952 年のヘルシンキからは芸術展示の時代に入ります。実は、1964 年の東京オリンピックのときも、芸術展示として美術部門の展覧会、芸能部門の公演が行われました。このとき日本は、スポーツをモチーフにした芸術ではなく、日本最高の芸術品を提示するという新しい戦略を打ち出したと言われています。

その後、1992 年のバルセロナからさまざまな文化プログラムが展開されるようになり、そして、一昨年のロンドン(2012 年)で「カルチュラル・オリンピアド」、「ロンドン 2012 フェスティバル」という非常に大規模な文化プログラムが行われました。

この後、リオデジャネイロ、東京と続くわけですが、そこでロンドンのレガシーを引き継ぐことができるかどうか。東京はそのことに大きな責任があるのではないかと思います。

実は、ロンドン大会の文化プログラムについては、おびただしい数のドキュメントがインターネット上で公表されておりまして、そのうちのひとつに、クーベルタンの言葉を発見しました。「オリンピックは、スポーツと芸術のウェディングである」というものです。実際、それを実現したのがロンドンだと思いますので、この後、ロンドンの 3 人の方々から具体的なプログラムの話を伺いたいと思います。

どうもありがとうございました。

## プレゼンテーション



ロンドン 2012 カルチュラル・オリンピアド  
ディレクター

ロンドン 2012 フェスティバル キュレーター

ルース・マッケンジー

たくさんの方々にお集まりいただいたことを嬉しく思っております。こうして、まだオリンピックまで6年あるという早い段階で集まって、このテーマについて話しているということは、素晴らしいことだと思います。私自身は、2012年のロンドン・オリンピックに際して開催されたフェスティバルのアーティスティック・ディレクターになったのは2010年のことでしたので、皆さんにご紹介する成果というのは、非常に短い期間で成し遂げたものになります。皆さんにぜひ学んでいただきたいことは、できるだけ早く準備を始めるべきだということです。2020年に向けて、いまから準備をすれば、ロンドンの2012年の文化プログラムよりも優れたものになると思います。

私からは、主にカルチュラル・オリンピアドのクライマックスであったロンドン 2012 フェスティバルに焦点を当ててお話ししたいと思います。ロンドン 2012 フェスティバルの企画の中心にあったのは、アーティストに対してコミッションをするということでした。オリンピックは、開催地に住む人々にとっては人生に一度限りの体験となりますので、アーティストにも人生に一度しか出会えないような優れた作品をつくってほしいという期待を持っていたのです。

アーティストに対して私達が言っていたことは、野心を持っていままで不可能と考えていたことを実現してほしいということでした。何人かのアーティストはオリンピックのテーマに沿うことはできないかもしれないと心配していましたので、私達がアーティストに提言したのは、オリンピックには「平和」というテーマがあるということでした。古代オリンピックでは、参加する国は休戦し、参加する人々が無事に競技をできるようにするという約束がありました。古代ギリシャでは、スポーツを観戦するだけでなくアートを鑑賞する場でもあり、アートの祭典でもあったわけです。こういったことから、多くの参加アーティストが「平和」というテーマを使ったのです。

私達のフェスティバルは、「ロンドン 2012」という名前ではありますが、英国全土にわたって開催されました。スコットランド、北アイルランド、ウェールズ、シェットランド諸島、シリー島近くまで、フランス近くまで、英国全土にわたって作品が展示されました。また北アイルランドの観光局は、北ア

イルランドの美しいビーチをぜひ宣伝したいと考えていました。多くの人にとって、北アイルランドというすぐ頭に浮かぶのが北アイルランド問題です。しかし、平和をテーマとした作品とともに北アイルランドのビーチを見せることができれば、イメージを変えることができると考えました。

私達は、アーティスト、それから英国のさまざまな機関とパートナーシップを結び、そのパートナーシップを通して英国のさまざまなイメージを世界に発信しました。アーティストの目を通して発信し、観光客にぜひ来てもらいたいという気持ちも伝えたわけです。

もうひとつは、パラリンピックのテーマでもあります。障害を持つアスリートの達成力に焦点を当てました。そして「アンリミテッド (Unlimited)」というプログラムが始まりました。同様のプログラムが東京でも継承されるということに対して非常に嬉しく思っています。【図 6】

アートプログラムには世界中のアーティストを誘致し、若いアーティストの活動を世界中に発信できると考えました。たとえば、街角でのライブイベント（ビッグ・バスク 2012）をロンドン中心部で繰り広げたり、Jay-Z、レオナ・ルイス、フローレンスなどの有名なミュージシャン達が参加する BBC との共同プロジェクトもありました。

そして、もうひとつ重要なテーマは、いままで見られなかった作品をこのチャンスに上演することでした。たとえば世界初演となったカールハインツ・シュトックハウゼンによる「光」というオペラをバーミンガムで上演しました。この作品は1週間のそれぞれの曜日に向けた7つのオペラから成り、その内の「水曜日」は上演されたことはなかったのです。この作品は、演奏者がヘリコプターに乗って上空から演奏するという、5時間の上演を要するオペラです。カルテットが乗り込んだヘリコプターが都市の上部を飛行し、その下でヘリコプターの音もその作品の一部として鑑賞するというものでした。世界中からバーミンガムの上演が注目され、世界中に報じられました。

有名なランドマークも会場となりました。たとえばハドリアヌスの長城、117 kmもの長さがあるローマ帝国時代の城壁の跡です。この場所は、デジタルアートのインスタレーションで活用されました。

もうひとつの例としては、世界遺産であるストーンヘンジで行われたプロジェクトがあります。世界遺産ですので通常は間近まで行くことはできませんし、火に囲まれたガーデンをつくることはもちろん許されていませんでした。しかし、今回のオリンピックのカルチュラル・オリンピアドを機に、フランスのアーティスト集団（Cie Carabosse）がこうした作品をつくり上げたのです。【図 7】



図 6



図 7

アーティストに対しては、大規模な作品のプロジェクトに取り組むように依頼をしました。そして変わった場所を選ぶようにということも奨励しました。たとえば、これまでのような劇場ではなくて、ビーチやランドマークのように、よく知られていて、だれもがアクセス可能な場所を選ぶことを優先した

のです。

また、重要と考えていたのが、ほとんどのプログラムが無料であるということです。「ロンドン 2012 フェスティバル」の 80%のプログラムは無料で提供され、そうすることで新しい観客を動員することができました。観客は、新しい作品にお金をかけるというリスクを取りたがらないかもしれませんが、無料で招待すれば、より寛大な心で見に来てくれ、新しい形の作品を多くの人に楽しんでもらうことができます。

そして、若い人達の参加と、彼らに人生に一度のチャンスを提供することはこのフェスティバルにとって重要でした。ベネズエラ出身の有名な指揮者グスターボ・ドゥダメルは非常に貧しい町の出身ですが、教育を受けスキルを磨きました。彼は、楽器の演奏を習っている若い人達、そして恵まれていない人達で、コミュニティで楽器の演奏を習っている人達のためのプログラムを提供しています。スコットランドにも恵まれない町があり、同じようなプログラムが展開されていますが、みなドゥダメルに会ったことはありませんでした。そこで、スコットランドの若い人達で 220 人のオーケストラを結成して、指揮者にドゥダメルを招いたのです。野外で開かれたコンサートは世界中に報じられ、本当に人生に一度のチャンスを提供できたと思っています。【図 8】

「アフリカ・エクスプレス」はとても興味深いプロジェクトで、これは、アフリカやヨーロッパなどのミュージシャン達を乗せた普通の列車が、英国内でツアーを行うというプロジェクトです。停車するそれぞれのコミュニティでワークショップ、コンサートなどを開くのですが、これはフェスティバルへの中では最も成功したプロジェクトの 1 つです。アーティストに信頼を置いた結果、ここでは良い意味で決まりごとが破られ多くのやっかい事を巻き起こしましたが、私はそれをととても嬉しく思いました。

【図 9】



図 8



図 9

指揮者のダニエル・バレンボイムとウエスト＝イースタン・ディヴァン・オーケストラのプロジェクトも興味深いものです。このオーケストラにはパレスチナのミュージシャンも入っていますし、イスラエル、レバノン、シリア、そういった中近東諸国のミュージシャン達で構成されています。彼らの出身地域の一部は、オリンピックには正式には参加していません。自国がオリンピックに参加していない人々や母国がない人にもこういったフェスティバルの参加を奨励しました。

また、いままではオリンピック開催期間中には街を追出されていたようなホームレスの人達が、彼らの音楽的能力を発揮できる機会をロイヤル・オペラ・ハウスと共に作りました。

ロンドン 2012 フェスティバルでは、私達の国は、新しいことに果敢にチャレンジする多様性のある国であり、さまざまな人達が居場所を見つけられるところだ、オスカー賞の受賞者からホームレスの人

達までが居場所を持っている場所なのだ、というメッセージを伝えたかったのです。

オリンピックというのは、本当にわくわくするような機会です。ですからアートも同じぐらいのわくわく感を提供できなければいけません。2012 年のフェスティバルでは、普段の英国が提供している以上のアートを提供できなくてはなりませんでした。私は、一生に一度の経験をつくったと思いますので、東京では二度目の経験ができることを期待しています。

ありがとうございました。

アーツカウンシル・イングランド  
エグゼクティブ・ディレクター  
(ロンドンおよび南東地域担当)

モイラ・シンクレア



皆様、こんにちは。暖かい歓迎をいただいて圧倒されております。オリンピックに向けて、英国と日本の間に良好な関係が築かれるきっかけになることを願っております。

私がアーツカウンシル・イングランドに入ったのは2005年のことでした。ロンドンでテロ攻撃があった直後、そして2012年のオリンピック・パラリンピック開催を勝ち取った直後のことでした。ちょうど英国にとっては、自分達が世界の中でどう理解されたいのかを考えるための、非常に面白く重要な時期に来ていたと思います。オープンで、安全で、訪れる者を歓迎する国として見られるために、文化をどう使うことができるかを知りたかったのです。

文化がオリンピックの一環となってから長い時間が経ちました。近代オリンピックの創設者とされているクーベルタンは、スポーツと文化と教育を融合させ、オリンピズムが努力のうちに見いだせる喜びや教育的価値、さらに普遍的で倫理的な生き方が創造されると述べていますが、皆さんもそのように取り組んでいただければと思っています。

私達も招致プロセスにあたっては、文化の重要性を主張しました。英国のアーティストのクリエイティビティが、周りの人達も豊かにし、そしてインスピレーションを与え、アーティスト自身が高みを目指すというチャンスを提供したいと考えました。それだけではなく、社会もそのポテンシャルをしっかりと引き出すということも計画を実施するにあたって重大なことでありました。

2004年にはテーマについて話し合われ、クリエイティビティ、クオリティ、イノベーションという論点で常に議論をしてきました。また、ロンドンをショーのように見せようと考え、そのためにはアートが関与することが大切だと考えました。また2004年当初からオリンピック以後に何を残していけるかということについても考えていました。既にそのころから英国の21世紀におけるアイデンティティについてさまざまな議論が生まれていました。ロンドンは、ただ霧の町、あるいは赤いバスの走る街だというだけではなく、近代的で現代において大きな意味を持つ街というメッセージを世界に発信したいと考えていたのです。

アーツカウンシル・イングランドは60年の歴史を持っております。4年間で16億ポンドを芸術、文化に投資することができます。私達のミッションは、偉大なアートをすべての人に広げることです。そのためには、芸術的表現を支援し発展させ、さらにそれらに投資することによって人々の生活を豊かにしようというものです。アーツカウンシルのミッションと、オリンピックに向けて作られたテーマには

重なっている部分があります。これは偶然ではなく、アーツカウンシルが、オリンピックの計画の中にも深く関与していったからです。私達は、2012 年はアートを多くの人に広げるための人生で一度のチャンスだと思いました。そこで3つのことをやりたいと考えて始めました。

まず1つ目が、アートに対する参加をより増やして、特に若者達の参加を呼びかけること。

2つ目が、アーティスト達の実績、価値を高めることです。なぜアーティスト達が我々の社会にとって大切であるのか、なぜ投資の対象として重要なのかを考えるプラットフォームを提供しようと考えました。

3つ目が、私達のセクターであるクリエイティブ・セクターを、新しいパートナーシップを通して強化していくことです。ルースはフェスティバルのディレクターで、ジャスティーン・サイモンズがロンドン市長のオフィスにいました。私達3人はいまでも協力していますが、まさに一度築かれたパートナーシップがいまでも生きているという証拠です。

「どうすればよりよくいろいろなことが実現できるか」という点で、アーツカウンシルとロンドン・オリンピックの主催者側とは意見が食い違うこともありましたが、いかにしてそれを乗り越えて実現させていくかということは実にわくわくすることでした。

2010 年以降、ルース・マッケンジーがアーティスティック・ディレクターとなってからは、やりやすい状況となっていました。ぜひここで皆さんにぜひご提案したいことは、文化的リーダーの必要性です。リーダーに皆をまとめてもらう、そしてビジョンをつくるということが大切だと考えています。

2012 年へ向けてどのような展望があったかといいますと、2006 年には英国におけるアートの活動は一定レベルに達していましたが、2008 年に北京からのリレーが私達に渡されると、文化プログラムが開始され、アートの活動もさらに広がって展開し始めました。これが2012 年まで続いていくわけです。もしかしたら2012 年以降、活動は低下してしまうのではないかと考えていましたが、2008 年レベルまで下がらないように、あるいは2006 年レベルまで下がらないようにしようと私達は努力しました。【図10】

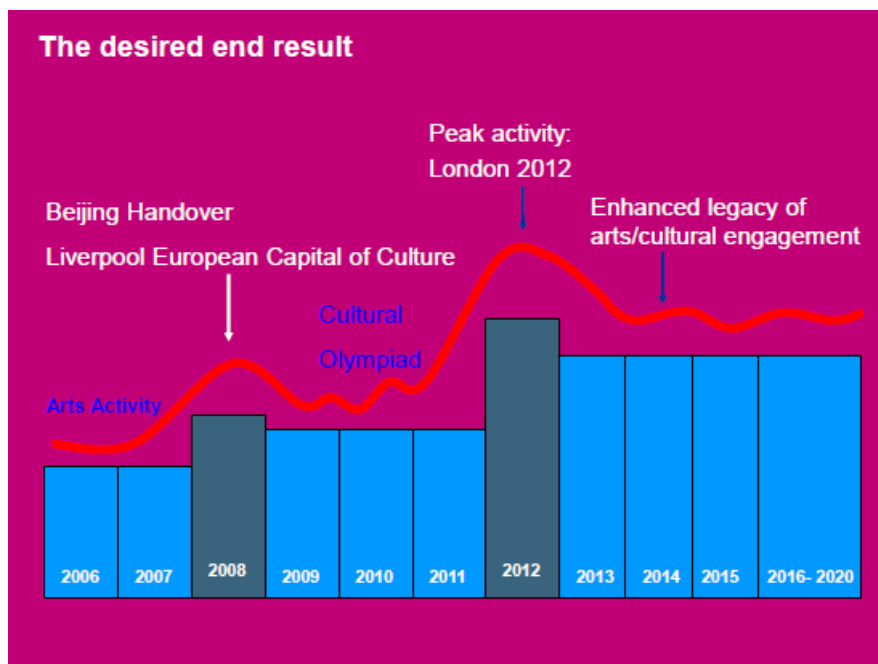


図 10

それでは、こういったスケジュールで進めたかをお話しします。2004 年、まずは招致ドキュメントをつくりました。この中には開会式、閉会式について、聖火リレーについてのビジョンが書かれていま

した。また、2008 年の北京オリンピック終了時から始まる 4 年間のプログラムも織り込まれていました。

そして、2007 年、「インスパニア・マーク」というものを作りました。地域の文化活動団体に、自分達のローカルなプロジェクトをオリンピックの一環として織り込むことを検討してもらうことになったのです。そして 2008 年から 4 年にわたる「インスパニア・プログラム」が始まりました。この「インスパニアード・バイ 2012」というマークをいろいろな組織が使うことができるようになったのです。

また 2009 年、アーツカウンシル・イングランドはコミッション・ファンドを提供することになります。この資金によって 2012 年のフェスティバルにさまざまな人達や組織が参加することができるようになりました。しかし、これは芸術的ビジョンが明確に設定されなかったことが要因となり、活動が分散してしまったことが課題となりました。

2009 年にはロンドン大会の組織委員会の下に「カルチュラル・オリンピアド・ボード」というものが設置されました。これでようやく文化プログラムに光が当てられることになります。このボードのメンバーの中には、さまざまなアート系組織、団体の要人が入っていました。さらに BBC、主な資金提供団体、アーツカウンシルもボードメンバーとなりました。ロンドン市長のオフィスもこの組織の一部となっていました。他のオリンピック開催都市では、街の中でフェスティバルがあって、さらに国内でフェスティバルを行い、そして資金をめぐって双方が競い合うということがありますが、東京ではそういうことは避けていただきたいと思います。国、それから東京が一緒になってやることを考えていただきたいと思います。

政治的な面からは、オリンピックがロンドンのためだけのものではなく、国全体が参加していることを見せることが大切でした。ただ、スポーツプログラムだけではそれは実現できません。そこで、国全体を結びつけるものが文化プログラムだったわけです。そのために「クリエイティブ・プログラマー」という専門職を置くシステムをイングランドの 9 つの地域と、スコットランド、北アイランド、それからウェールズにも設けました。それぞれコンタクトポイントを設けて、この文化プログラムに参加したい人達とはそこで接触できるようにしました。

2010 年にはルース・マッケンジーがディレクターに任命され、ステークホルダーに 2012 年に向けた一つのビジョンを持ってもらうことに成功したのです。そして、世界クラスの文化的なプロジェクトをオリンピックの中心に据えて、英国全土でプログラムが行われることになりました。

それはいままで芸術に関わってきた人達だけではない新しい観客を呼び込むことを目的としたものです。そして 1,000 万人が参加するチャンスを提供し、私達が期待していた以上の成果を上げました。コミッションとしては 200 以上、160 の世界初演、英国初演がありました。そして、1,800 万人がプログラムに参加し、1,980 万人以上がフェスティバルに参加したのです。つまり、4,000 万人がこの文化フェスティバルに参加してくれたということです。そしてそのうち 8 割の人達は無料のイベントへの参加者でした。

メディアの活用では、メディアパートナーによる情報発信、またツイッターなどのソーシャルメディアが重要なツールとなりました。いくつかのイベントでは、保安上、告知がかなり遅く出されたものもありましたが、そうした際の有効な情報ツールとなりました。さらにウェブサイトは海外からの訪問者だけではなく、国内の訪問者にとっても重要な情報源となりました。

予算について言えば、1 億 2,600 万ポンドがこの 4 年間のプログラムに使われました。アーツカウンシルは大きな資金提供者であることがわかります。しかし、資金源が多様なことには、よい面と悪い面があります。【図 11】

こちらのスライドは、文化プログラムが全国規模だったことを表すものです。このようにして地域レベルで多くの人達の参加を呼びかけたわけです。【図 12】

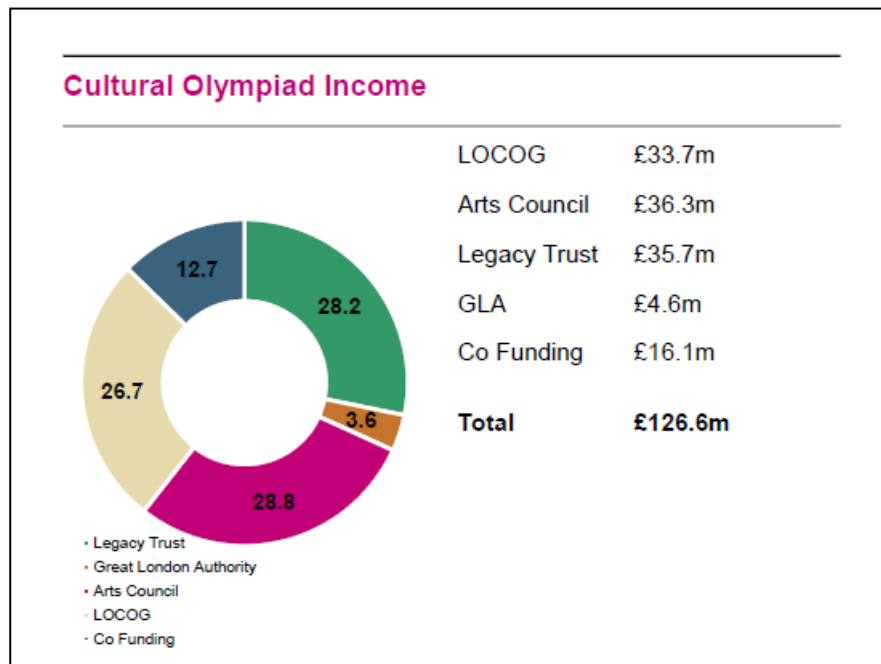


図 11

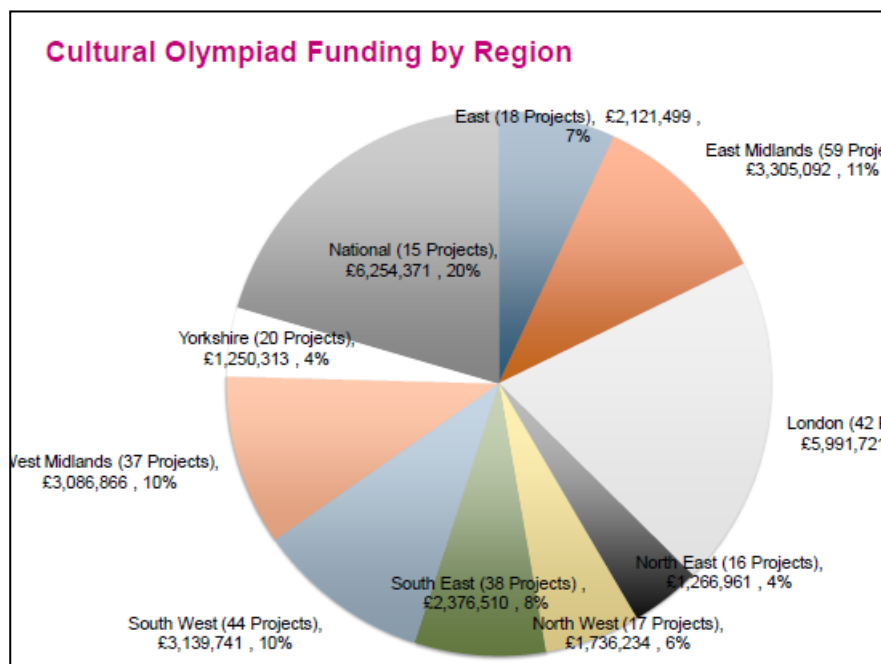


図 12

もうひとつ、こちらのスライドからは、さまざまなアートに投資がされたことがわかります。演劇、ビジュアルアーツ、ダンス、音楽も非常に人気がありました。それから、文学プロジェクトもこの中に入っています。さらに、コラボレーション型アートプロジェクト、サーカス、それから屋外のイベントやフェスティバルもプログラムの重要な一環を成しています。【図 13】

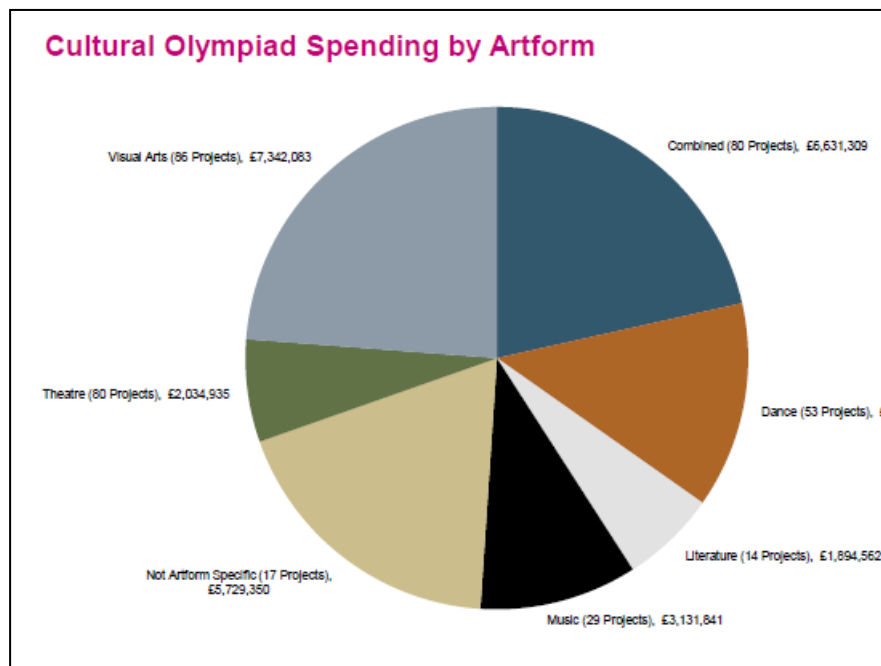


図 13

そうしたことが英国のレガシーとなった点は注目されます。バーミンガムやリーズなど、いままでアートという観点ではあまり話題に上らなかったところでも、大規模で野心的なアートイベントを行いたいという気運が生まれてきました。そして、文化ツーリズムという観点はこれまで以上に大きな話題となっています。ロンドンにとって文化というのは大きなセールスポイントのひとつだったわけですが、ロンドン以外でもアーツカウンシルは、「ビジット・イングランド」というプロジェクトを英国政府観光局と共に実施しています。それぞれの都市がその特徴を活かして、ロンドンと対抗するのではなく、ロンドンと協力して観光客を呼び込もうとしているのです。

また、2016 年に向けてブラジルのアーツカウンシルとも協力して、国際的な交流プログラムを行っております。お互いに学びながら大変素晴らしい経験を得ていますので、ぜひ 2020 年に向けて東京も考えていただけたらと思います。

さらに文化芸術およびクリエイティブ・セクターでの職業体験プログラムというファンディングをオリンピック以降にも実施して、6,500 の若者達のインターンシップなどを受け入れています。経済的に厳しい時代にあって、若い人達を対象としたサポートをオリンピック以降も続けようとしています。

英国だけでなく国外のアーティストもプログラムに参加することで、文化交流によって多くの人が刺激を受けます。また、文化ツーリズムで地方の町に多くの観光客が訪れ、作品を見るだけでなく、作品づくりにも関わることができます。障害を持つアーティストは、いままでと違った形で参加し、活躍しています。私達の都市の多様性、多文化性が、2012 年に示され、それ以降も輝いているのです。自分達はどのようなアイデンティティを持ちたいのか、これは東京にも通じるテーマであると思います。

私達は文化、伝統を持つ国であり、そこに惹かれて訪れる人達がいますが、それだけではなく、やはり現代を表すものが必要だと思いました。現代的なものと伝統的なものを結びつけることで、新たな創造が生まれることを私達は発見しました。ここ東京でもそれは大きなチャンスになるのではないのでしょうか。

いま、皆さんは素晴らしいチャンスを手にしております。ですから、最終的に何を目指すのかを考えていただきたいと思います。いま、全てを決める必要はないと思いますが、どういう方向に行きたいの

か、どれぐらい大きな希望を持つのかということは考えられると思います。そのためにはやはり文化セクターでのリーダーシップが大切です。そして、リーダーを組織委員会の中に置くことが必要です。そうでなければ、時間も努力も無駄になってしまう恐れがあります。

そして、この後ジャスティーンがお話しすると思いますが、オリンピックに向けてキーとなるいくつかの時点があり、そうした時に文化をいかに結びつけていくか考えていく必要があります。また、統一された一つのブランドを持つことを考えるべきでしょう。そして、オリンピック・スポンサー以外の人達にも参加してもらうような柔軟性も必要ではないかと思います。何らかの形でみんなが参加できるという雰囲気をつくるのが大切です。【図 14】



図 14

皆さんが 2020 年に素晴らしいオリンピック、そして文化イベントを開催されることを期待して、楽しみにしております。ありがとうございました。



ありがとうございます。東京では素晴らしい数日間を送ることができており感謝申し上げます。私からは、文化と、そして開催国、開催都市についてロンドンの立場から話をしたいと思います。特にこういった障害があったのか、成功のところだけではなく、失敗したところのほうも皆さんも学べることが多いと思います。

ロンドン・オリンピックの開会式は10億人がテレビを通して見ていました。アメリカでは4,100万人の視聴者がいたといわれています。オリンピックの開会式でそれだけの人が見ているということはかつてありませんでした。つまり、それだけ大きなスポットライトが開催都市、開催国に当たるということで、その時に私達はこういったメッセージを世界に伝えたいのかということから考えたのです。

ロンドンを訪れる人は何を目的としているのでしょうか。なぜロンドンに来たのかとアンケートをとると、80%の回答者は文化が目的だとしています。住むにしても、仕事をするにしても、観光にしても、文化が目的であることが80%です。しかしこれまで数世紀の間、英国は重工業に支えられた国というイメージが支配的でした。「ビッグ・スモーク」というニックネームまであり、常に大気汚染に悩まされていたからです。しかし今のロンドンは全く様変わりしました。アート、創造性、イノベーション、金融、流通、それから文化遺産、こういったものがロンドンのイメージとなっています。

それでは、私達のオリンピックを主催する上でのビジョンは何だったのか。それは、文化が中核となり、ストーリーを形成するような大会にすることだったのです。

ビジョンは6つのポイントに分けられます。

1つ目は、国際的な立ち位置、グローバルなメディアが注目するこのチャンスを、私達の文化を伝えるために使いたいと考えました。

2つ目は、旅行者にとって最大限に満足いく体験を提供するということです。そしてオリンピック開催を理由に、他国へ行ってしまうようなことにならないようにしようと考えました。

3つ目は、都市全体で祝うということをしたいということ。チケットを持っている人達だけではなく、誰もが参加できるような機会を与えようと思いました。

4つ目は、ストーリーテリングを重視していました。このロンドンという都市のイメージを変えたかったので、ロンドンが持つ資源を違った目で見たいと考えました。

5つ目は、フェスティバルの間口を開いていくということです。一生に一度限りの機会を活用し、誰

もがお金を払わずに無料で参加のできる、最大級のフェスティバルにしたかったのです。

そして6つ目としては、1人のキュレーター、1つのフェスティバルという点も重要なテーマでした。政府が主導するのではなく、また主催都市の組織委員会が主導するのでもなく、アーティスティック・ディレクターが率いるフェスティバルを行いたかったのです。これまで、政府や組織委員会が主導することによって失敗に導かれた大会を数多く見てきました。私達はその失敗を繰り返したくはなかったのです。

オリンピックの文化プログラムというのは非常に複雑です。通常のフェスティバルを開催するときよりもいろいろなことを考えなければいけません。そういった意味で、多くの障害が存在します。障害や失敗のほうを検討するに値すると思いますので、簡単にいくつかご紹介します。

先ほど少し観光についてお話ししましたが、英国の主要紙では開催前の2008年に、オリンピックは観光にとって災いの種だ、という見出しを掲載しました。ロンドンは、1,500万人が毎年訪れる観光都市です。オリンピックの主催都市になると、料金が上がってしまったり、ホテルの予約が取れなかったりといった理由から多くの観光客が期間中を避けるようになります。私達は、1,500万人もの観光客が訪れることによる観光収入に大きく頼っています。そこで、どうやって違う場所が選ばれることを避けられるだろうか、また、別のところに行ってしまったも、大会が終わった後に戻ってきてくれるようにするには何をしたらいいのかということを考えました。

もうひとつの障害は資金不足でした。最初から私達は予算が確保されていたわけではなく、クリエイティブな解決策を考えなくてははいけませんでした。たとえば、オリンピックを主催するときには、通常、都市を装飾するための広報用予算があります。私達は、その予算を文化のために使おうと考えました。文化をテーマにして街を活性化することは、街中に旗をたくさん置くよりも効果があると考えたわけです。

もうひとつの障害は、複雑な関係性や組織構造です。これはオリンピックにはつきものです。全員が新しいアプローチで、非常に複雑で大きなパートナーシップを築かなければいけません。文化フェスティバルを制作するには、警察、輸送局、スポンサー、政治家、メディア、そしてもちろんアーティスト、こういったさまざまなステークホルダーが集まって、新しい形で協力をしなければいけませんでした。

さらに心配事としてあったのは、インフラです。たとえばロンドンの地下鉄は世界でも最も古い150年の歴史を持ちますが、きちんと必要な輸送キャパシティを提供できるかという懸念が常にありました。

また、過去の大会の歴史を振り返り、その失敗を活かすこともしました。主催都市が文化フェスティバルを開催すると、通常は組織委員会もまた別のフェスティバルを制作します。つまり、2つのフェスティバル、2つのマーケティング、2つの組織、2つの企画、2つのチーム、それらが互いに対抗し競争するようになるのです。私達はそういった事態は避けたいと考え、1つのチーム、1つのフェスティバルをつくり上げることにしました。

加えて、スポーツをテーマに都市のストーリーをどのように語ったらいいのかと考えました。バルセロナ、アトランタ、そしてシドニー大会での100メートル競技の写真があります。【図15】全部同じに見えますね。どこで開催されたかわか



図15

りません。つまり、私達は、違いを打ち出すところにストーリーテリングの焦点を当てたわけです。それではストーリーテリングのプロジェクトをいくつかご紹介しましょう。

こちらはエリザベス・ストレイブというニューヨークのコンテンポラリー・ダンスのカンパニーです。このカンパニーはロンドンの有名な建築物を舞台に作品を制作しました。その作品によって、それぞれの建築物のストーリーがもう一度生まれるわけです。そしてこの写真が、世界中のメディアで流れました。つまり、国際的なアーティストにとっても貴重な機会であるとともに、都市にとっても、ロンドンにとっても、マーケティングとして効果がありました。新たな目で私達の都市に光が当たったわけです。

【図 16】

もうひとつ、全く異なるプロジェクトで、同じアイデアを使っているものとしては「ハット・ウォーク」というプロジェクトがあります。ロンドンには何百ものモニュメントがあります。そして、あまり気づかれずに壁紙のような存在になってしまいがちです。そこで、私達はたくさんの帽子屋さんにごこのような彫像や胸像のために帽子を制作してもらいました。モニュメントに特別な帽子を期間中被せたのです。これはヘリテージと現代の文化が融合したものになります。【図 17】



図 16

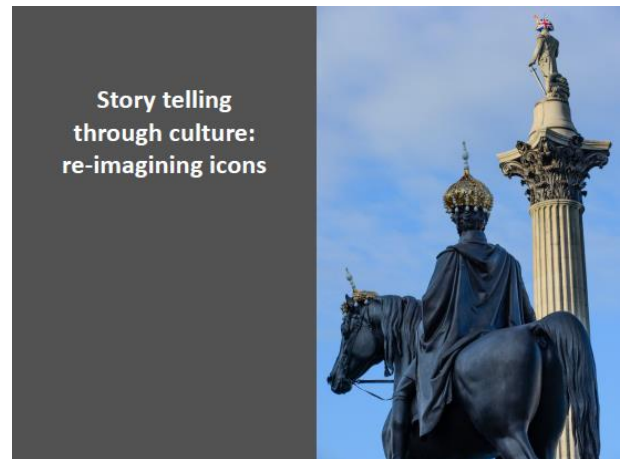


図 17

もうひとつのプロジェクトが「ピカデリーサーカス・サーカス」です。ピカデリーサーカスはロンドンの中心部にある重要なランドマークです。そこに、本物のサーカスを招き入れました。そのために1945 年以来初めてロンドンの中心部をすべて閉鎖しました。交通の規制などでたくさんの問題を抱えていましたが、この中心部の閉鎖を実現できました。【図 18,19】



図 18



図 19

さて次は参加型プログラムについてお話ししたいと思います。オリンピックでは大会の競技チケットの購入が難しく、お金を持っていても、多くの人にはチケットが高すぎるという状況になってしまいます。そこで私達は、全ての人がこの祝祭の一部に関わる機会を設けました。たとえば 23 か国の人達が参加したダンスのプロジェクト「ビッグ・ダンス」を展開し、トラファルガー広場に何千人もが集まりました。こういったプロジェクトを開催することによって、祝祭における創造的プロセスに参加できるチャンスを提供することができました。

また、従来のようにロンドン塔などの歴史を伝えるだけではなくて、隠れたロンドンの魅力を伝えたいと考えました。ロイヤル・オペラ・ハウスでは、運河でオペラを上演しました。あまり知られていませんが実はロンドンは運河網が発達しているのです。それから、ロンドンにたくさんある野外のスイミングプールのうち、歴史ある野外プールでバレエを上演しました。

また、若い方達の参加も重要で、ギグス（ビッグ・バスク 2012）と呼ばれる音楽祭を開きました。何千時間もの時間をかけて、ロンドン中で演奏をしたのです。そうすると、この街の雰囲気も全く新しいものになっていきました。

さらに、優れた役者達が、突然街にあらわれて、シェイクスピアの戯曲を上演するというプログラム（ポップアップ・シェイクスピア）もありました。

このフェスティバルは、ロンドン中心部や、オリンピックの会場だけではなくて、ロンドン全域、そして英国全土で開催されました。200 人のアーティスト、5,000 ものイベントがこのフェスティバルに参加しました。そして、ほとんどが無料で提供されたのです。

さてここで、事業を実施するタイミングに関して一言申し上げます。もちろんオリンピックで一番重要なのは、スポーツの競技です。私達は、スポーツ競技と対抗するのではなくて、スポーツ競技を補完する形でフェスティバルを開催することを考えていました。フェスティバルとしては、大会前、オリンピックとパラリンピックの開催の間、そしてフィナーレに力を注ぎました。大会前には何千ものメディアが準備のためにロンドンに入ってきて来ます。しかしその際は、どちらかという問題点を取り沙汰されるのです。私達は、多くの優れた点もあるということを、フェスティバルを通して伝えていきました。

それから、メディアとのコミュニケーションについてです。世界中から 2 万の公認メディアが集まってきますが、1 つの国には、1 つメイン報道局がその競技大会の報道をすることになっていました。その一方で、私達は公認ではない約 9,000 ものメディアとコンタクトをとって報道してもらったのです。

それからオリンピック後に残すレガシーについてですが、まずは、観光に対して大きなネガティブな影響はありませんでした。そして、約 12% の観光客の増加が、オリンピックの翌年に実現できました。さらにロンドン市民の 90% が、ロンドンのイメージが上がったという反応がありました。

国家ブランド指数では、文化的評価が 5 位から 4 位へ、そして街が歓迎的であるかどうかという項目では 12 位から 9 位まで上がりました。通常は戦争や自然災害がブランド指数に影響しますが、こういったイベントでランキングが変わることは非常に稀なのです。



図 20

さらなるレガシーですが、これはストーンヘンジのレプリカで、トランポリンが下に敷かれています。

【図 20】 とても人気があり、いま、国際巡回中です。優れた作品がどのように出てきたのかを知るためのよい例だと思うのですが、私達は最初に、アーティストに対して、いままでやりたかったけれどもできなかったことは何か、と尋ねたのです。そして彼は、飛び跳ねることのできるストーンヘンジをつくりたいと言ったのです。クレイジーだと思いましたが、それを実現してもらったのです。

私からは以上です。これまでにない最高のカルチュラル・オリンピックを築いてください。ありがとうございました。

## 質疑応答＋パネルディスカッション



### パネリスト

ルース・マッケンジー

モイラ・シンクレア

ジャスティーン・サイモンズ

### モデレーター

吉本 光宏

### 【吉本】

改めまして、3人のゲストの皆さん、素晴らしいプレゼンテーションをありがとうございました。

ここで会場の皆さんからご質問を受けたいと思います。この後のディスカッションでゲストの方々にご意見を伺いたいのですが、ぜひそこで皆さんのご質問も含めて考えていきたいと思っています。

### 【質問者 1】

建築の仕事をしている者です。質問は2つあります。

1つ目は、オリンピックを通して日本の文化、日本人というのを発信するチャンスですが、どのようにして自分達を客観視したらいいのかというのをお聞きしたいです。

2つ目は、ちょっと変な質問なのですが、オリンピック・ロゴとキャラクター、ウェンロック、あれはどのように出てきたのでしょうか？

### 【ルース・マッケンジー】

1つ目の質問と2つ目の質問が鏡合わせのような状態になっていると思いますので両方についてお答えいたします。

1つ目の質問に対する重要な答えですが、やはりアーティストを信用するべきだということです。アーティスト達は目に見えないものを顕在化してくれます。我々に対して、自分達をどう見るのか、ある

いはどういう問題や課題があるのかを示してくれます。彼らが自分達の表現をできるようにしてください。検閲などをするのではなく、新しいアイデア、新しい表現方法が出せるようにしていただきたいと思います。古代ギリシャの時代から、たとえば演劇は民主主義の真実を描き出したわけです。一般の人や政治家が理解できないものを劇として表していったわけです。

2 つ目の質問の答えですが、ロンドン・オリンピックのマーケティング部門が、ロゴマークやマスコットのデザインのコミッションをしたので、アートプログラムの一環として行ったわけではありません。つまり、アーティスト達が関わってロゴマークやマスコットをつくったわけではなかったのです。私達はポスターづくりにはアーティストに関わってもらい、その結果にはとても満足しています。広告代理店ではなく、やはりアーティストを信頼して任せたほうがよいという好例ではないかと思います。

## 【質問者 2】

2 つ質問がございます。

1 つ目は、ロンドン・オリンピックに際して、文化に相当のお金と時間と人々のアテンションを使うということに対する抵抗はなかったか。文化といっても、どうしてもコンテンポラリー・アートが主になるとしますので、それに対する保守的なクラスとか政治、あるいはスポーツ界等々からどの程度の抵抗があったか、それをどう乗り越えられたかをお尋ねしたいです。

2 つ目は、2020 年を機会に日本のイメージとしてどこにポイントを置いたらいいのか。言い換えれば、英国、あるいはヨーロッパから見た日本の非常にポジティブなパーセプション、イメージと、ネガティブなイメージはそれぞれ何であるのか。前者は大いに強調し、後者はそれを打ち消すような努力をすべきだと思います。そういう点で、たとえば、ロンドンの汚れた空気とか、ロンドンタワーの悲劇とか、そういう否定的なイメージを、頭に置きながらビジョンを決められたと思いますが、我々が参考にすべき、日本に関するネガティブなイメージは何か。たとえば、地震とか、原発等が、どの程度ネガティブなイメージとして、いま、我々は考慮すべきか。逆にポジティブなイメージ、漫画、アニメ、食というのは非常にポピュラーですが、これも、一部の保守的な人にとってみれば、それは日本の文化の代表ではないという見方もあります。どの程度、そこを日本の強みとしてさらに強化すべきかについてご意見を伺えればと思います

## 【モイラ・シンクレア】

文化に対しての抵抗だけではなくて、オリンピックに対しての抵抗がありました。一般の人達、そして政治家のモチベーションや期待が、これからの 6 年の間アップダウンするということの心構えをしてください。

たとえば、文化は大きなメリットを国にもたらすことができ、そのメリットは、大会までの期間だけでなく、大会の後にももたらされるものだということを説得しなければいけません。さらに政治家が、プログラムや開会式の予定内容に懸念を表明したことも何度もありました。

あまり成功しなかった英国の例では、「ミレニアム・ドーム」があります。これは、21 世紀を祝うための記念碑で、よいビジョンがないまま大きな投資がされ、思い描いていた結果を得られませんでした。そういった失敗経験から、きちんとしたアーティスティックなビジョンがあって、独立した形で運営できることが必要だと言うことができます。政府から距離を置くアームズ・レングスの立場のアーツカウンシルの存在は、対話をはじめいろいろな場面で大変助けになるものでした。



### 【ルース・マッケンジー】

アームズ・レングスの原則はとても役立つものですので、皆さんにお勧めします。アート、そしてアーティストというのは、直接政府によって扱われるべきものではなくて、独立した組織がアーティストの面倒を見るべきであり、その役割を担うのがアーツカウンシルです。政府からアーツカウンシルに資金の提供があるかもしれないけれども、アーツカウンシルがアーティストにお金を出すということが重要です。

そして、大事な原則として、文化的な人を信頼し、アーティストック・ディレクターに任命して、アーティストについての決定権を与えることです。そして、私の上にいる

カルチュラル・オリンピアドのボードメンバーは文化人なわけですから、なぜなら、私達はアーティストを守らなければならないからです。

時には、私達の決定に影響を及ぼそうとする政治家との間に立って、アーティストの自由度を守らなければいけません。政治家達はアーティスト達と直接話すのではなく、私と話します。楽ではありませんが、とても重要な仕事です。アーティスト達に素晴らしい作品をつくってほしいと思うのであれば、彼らには自由が必要なのであって、人々に影響を与えさせてはいけないのです。

政治家達も、最後のフェスティバルを熱心にサポートし、祝福してくれました。彼らが私のような仕事をしないからといって非難することは筋違いです。政治家がしたのは、私を文化の専門家として仕事をしよう任命したことです。作品を見て、実施するべきかどうかという難しい判断をしなくてはなりません。誰かがやらなくてはなりません。重要な点は、政治家ではなく文化人のチームがそれを行ったということなのです。

### 【ジャスティーン・サイモンズ】

大震災の話が少しありましたが、既に文化プログラムがいくつか始まっていて、その大震災がどういった意味を文化に与えているのかという検討もされていると聞きました。そして、それがフェスティバルの内容に反映されようとしていることも聞きました。始めのころ英国全土にわたって多くの人がオリンピックに対しては批判的でしたが、最終的には全員がそれを受け入れるような状況になって一体感が生まれたということがあります。

### 【ルース・マッケンジー】

それから、日本のイメージについてご質問がありましたが、それについてお答えするのは私達の仕事ではないと思っています。皆さんが日本が持つ文化の多様性を祝うべきだと思うのです。そして、世界に何を伝えたいのかということを考えることだと思います。世界に発信する素晴らしいチャンスです。世界が耳を傾けてくれるチャンスでもあるのです。この時、全ての人達が日本をフォローすることになります。

私達も、フェスティバルの中では、全ての分野のアート形式を取り入れました。今回のスライドには含めていませんが、伝統的なアートの形式も実際には含まれています。

### 【質問者 3】

ロンドンで美術史を学んでいます。質問が2つあります。

1つ目は、ビジネスやファイナンスにバックグラウンドを持つなど、アートにあまり関係ない人もボードのメンバーとして迎え入れたのかどうかという点です。アーツカウンシル・イングランドの報告書に、経済の中での文化の持続可能性を保つ上で、アートの組織の中にアート関係者以外も雇用することがよいとあったと思います。

2つ目は、アーツカウンシルとしては、英国と他国の間のパートナーシップによるビジネスの発展が重要だと考えているかどうかという点です。「エクスポート・トゥ・ジャパン」というイニシアチブにより、英国の企業は、2020年までに日本で事業を拡大しようとしていると思います。

### 【モイラ・シンクレア】

おっしゃるとおりアーツカウンシルは、ビジネススキルがアーツ、文化の部門にとって大切だということを強調していました。アートのためのパブリックファンディングは、この4～5年、落ち込んでいたわけです。そこで、ビジネスのノウハウを入れることで文化の専門性を台無しにしてしまっただけかもしれませんが、特にマーケティングなどを行ってもらうことは必要です。それから、アートの活動の一部を商業化していくということは考えなければなりません。

公的な投資と民間の投資ではどれくらいのバランスがよいのかといった議論もできると思いますが、やはり公的な投資はアートの品質の面などを考えた場合にも重要であると私達は考えております。それから、スポンサーシップの問題ですが、英国も長い時間をかけて育ててきました。日本の文化組織にも、日本のマーケットに関心を持つ英国企業にアプローチをして、官民のパートナーシップを築いていくチャンスがあると思います。

### 【ルース・マッケンジー】

もちろん、文化組織にとって、オリンピックはスポンサーと手を組むチャンスになると思います。オリンピックでは、新しい国際スポンサーのマーケットができ上がるからです。皆さんも、文化ビジョンをしっかりと打ち立てていながら計画を立てれば、そういうオリンピックのスポンサーと手を組んで、彼らからの追加予算を皆さんの文化プログラムの中で使っていただく方法はあると思います。オリンピックは豊かで多様なパートナーシップを築くチャンスでもあります。注意深くブランド・ルールを定め、行っていくことが必要です。



### 【吉本】

ありがとうございます。いまの最後のご質問で、ボードメンバーの中にビジネスパーソンがいるかという質問がありましたが、カルチュラル・オリンピアド・ボードの中にはビジネスパーソンはいなかったと思います。トニー・ホールさんがチェアマンで、あとは英国を代表する文化関係者だったと思います。先ほどルース・マッケンジーさんのおっしゃった、アーティストを守ってくれた、あるいはルースさんのディレクションをしっかりとサポートしてくださった方々が、そのトニー・ホールを長とするボードでした。トニー・ホールさんはLOCOGという組織委員会のボードメンバ

ーでもいっちゃって、その中には、ビジネスパーソンもいっちゃったのではないかと思います。

私がこの場でおうかがいしたいのは、アーティストや芸術関係者をどうやって巻き込んでいくのかということです。日本ではまだ文化関係者の多くが、オリンピックは自分達には関係がないものだと思っている。そういう人達をどうやって巻き込んでいくのかを、ご経験を踏まえてお話しただけたらと思います。

### 【モイラ・シンクレア】

皆さんが、アーティスト、あるいは文化関係の方であれば、ぜひ関わりたいという気持ちを持っていたければと思います。本当にアーティスト達は、オリンピックによってパートナーシップを築くことができ、新たなプラットフォームを得て、そこからさらに大きな役割を地元、全国に、さらには国際的にも広げていくことができたわけです。なかには、より大きなコミッションを得られたり、外国からコミッションを得られたりするアーティストもいました。異なる人々や異なる方法で仕事をする事で、より野心的にもなったのです。

オリンピックを見て、皮肉にいろいろ考えることは簡単です。でも、そこにはこういうチャンスがあるという楽観論を皆さんにお届けできればと思っています。いま、皆さんには十分時間があります。ルース・マッケンジーさんが言ったように、一緒に夢を持つことができると 생각합니다。夢を見ることで、アートというものを中心に据えることができると 생각합니다。それを最初に持つことができれば最後まで走り抜くことができるはずです。

### 【吉本】

ありがとうございます。アーティストを巻き込んでいくということについて、ルースさん、何かありますか。

### 【ルース・マッケンジー】

ロンドンがオリンピック招致に成功したと聞いた直後、実は私は非常にネガティブに考えていた一人でした。どういうチャンスがあるのだろうと思っていました。むしろ、お金が文化から取り上げられてしまうのではないかと危機感を持っていました。オリンピックの施設整備に全部流れてしまうのではないかと。でも、それは間違っていました。

今回、日本でお会いした方々に、当時の私のような考えを持っている人はいませんでした。皆さん、本当に熱心で、また実践的で、非常に面白く、またラジカルな考えを持っている方々ばかりでした。日本にとって、日本と世界の関わりにとって、あるいは、皆さんのアジア太平洋地域の近隣諸国との関係にとって、これはどういう意味を持つのか、あるいは、本当に秀でたアートをやるにはどうしたらいいのか、若者や高齢者も含め皆を巻き込むチャンスだととらえているように思いました。そういう考え方を持っているということに、私自身とても感動いたしました。きっと素晴らしい文化プログラムができると私は感じています。

### 【吉本】

ありがとうございます。本当に素晴らしいプロジェクトというのは、芸術関係者だけでできているわけではなくて、そこにはスポンサーの方もいるでしょうし、あるいは地域の人もいるでしょうし、アーティスト以外のいろいろな方とパートナーをつくって、この素晴らしいプロジェクトができたのだと思います。

そのパートナーのことについてお伺いしたいのですが、特にロンドン 2012 フェスティバルでは英国全体を 13 地域に分けて、それぞれにクリエイティブ・プログラマーを配置してフェスティバルを全国展開されたとお聞きしましたが、地方とどうやってパートナーを組んでいったのでしょうか。

### 【モイラ・シンクレア】

率直に申し上げますと、いろいろ試して、うまくいったものもあれば、うまくいかなかったこともありました。どうやったら最も効果的なパートナーシップができるかを理解するにも時間がかかりました。もちろん、最初の数年間、特に大会、オリンピックに対する熱意というのは、ロンドンに近い地域のほうが高かったのです。距離が離れていくと熱意もどんどん冷めていきます。北東のほうの人達は、パートナーになりたいかどうか、はっきりしないような感じでした。クリエイティブ・プログラマーの人達は、ローカルレベルでその熱意をつくり上げていくということをしていました。そんなに予算はとっていませんでしたが、アーティストとコミュニティをつなげる役割を担える人達でした。



彼らの役割も時とともに変わり、4 年間のプログラムの最後の方では、もっと効果を発揮できました。そして、地方自治体もパートナーとして関与させることは重要でした。

最初のころは、全国的な規模の会社がそういった地域に入り、その役割を全て担ってしまうのではないかと懸念されていたのです。けれども、最終的には大きな組織と小さな組織の間の効果的なパートナーシップは築けるということが理解されました。そして、ローカルな組織や小さな規模の芸術団体に、大きなプロジェクトの一部になるという役割もあることがわかりました。

### 【吉本】

ルース・マッケンジーさんにお尋ねします。全国展開されたプロジェクトを芸術監督としてひとつの大きなものとしてつくり上げていくのに相当ご苦労があったのではないかと思います。そのあたりのことについてお話しただけないでしょうか。

### 【ルース・マッケンジー】

私は 2010 年という遅い時期にディレクターに任命されたということで、困難がいろいろありました。多くのプロジェクトは、既にその時点で企画されていました。これは、アーティストック・ディレクターにとっては良い状況ではありません。なぜなら、イエスかノーかを判断することがしにくいからです。アーティストック・ディレクターがビジョンをつくり上げて、その夢をつくり上げて、パートナーとともに最初から作り上げていくということをやった方がやりやすいのです。もし文化ディレクターを任命するのであれば、できるだけ早く任命することをご提案します。

どのような段階であっても、どこかでノーと言わなければいけないことがあります。素晴らしいアイデアがたくさんの人から提供されるわけですが、全部イエスと言うのであれば、フェスティバル・ディレクターという立場は必要ないのです。選択し、キュレーションによってプログラムを作っていくとい

うことが、よいプログラムをつくる唯一の方法です。これは、世界中のフェスティバルで実証済です。皆さんに申し上げたいのは、早くフェスティバル・ディレクターを任命して、プログラムをつくり、選んでいく権限を与えてほしいということです。

### 【モイラ・シンクレア】

もう一点、皆がフレキシブルに、常にいろいろな可能性にオープンに考え続けることが大事だと思います。よい例が「ビッグ・ダンス」のプロジェクトです。この「ビッグ・ダンス」のプロジェクトは、ロンドン市庁のチーム、それからロンドンのカウンシル、ロンドンの委員会がオリンピックの前に一緒になって企画したアイデアです。人がたくさん集まってダンス作品を作ろうという野心的なアイデアが文化プログラムを通して発展していきまして、2012 年には大規模なプログラムになっていました。ロンドンだけではなく全国的に行われたプロジェクトでした。最終的には 23 か国で 500 万人が参加しました。

### 【ジャスティーン・サイモンズ】

これは、全国的によいモデルになったと思います。最初は、ハブ構造で作られていきました。まず、それぞれの地域にリーダーとなる団体が選ばれ彼らがハブとなって、活動をそれぞれの地域でどんどん広げていきました。10 か所のハブが英国国内で作られ、そこから広がっていきました。「ビッグ・ダンス」というひとつの同じストーリーを全国的に展開できたわけです。そして、そうすることでコミュニティレベルの関与の大規模な広がりが得られ、国際的な広がりも得ることができました。

### 【吉本】

ジャスティーン・サイモンズさんにパートナーのことでお尋ねしたいことがあります。先ほどご紹介にもありました「ピカデリーサーカス・サーカス」を行うために、ピカデリーサーカスを 1945 年以降初めて道路閉鎖をしたと聞きました。ジャスティーンさんは文化部長のお立場で、ロンドンのあらゆるセクションの人達と協力してあのようなプロジェクトを実現していったと思うのですけれども、そのあたりのお話を少ししていただけませんか。

### 【ジャスティーン・サイモンズ】

こういったクレイジーなプロジェクトを実現するためには多くの人を説得する必要がありました。警察等の関係者は、オリンピック期間中に交通が順調に流れ、渋滞が避けられるようにしたいと考えていました。でも、私達は逆を提案しようとしたわけですから、ミーティングで決裂することは間違いありませんでした。

しかし、ここで鍵だったのは、段階に分けて進めたことです。絶対に合意をもらえないというのはわかっていましたから、第 1 段階ではまず実現可能性の調査を行ったのです。ミーティングの席についた人全員にとって、全てがうまくいき、最後にきちんと清掃までできるということが非常に重要でした。そのために、



輸送、清掃、警備などについて実現可能性を調査したことで、全員がこれは可能だという自信を持ちました。この作業を最初の段階でやらなければ、ゴーサインはもらえなかったでしょう。

それから、実現までたくさんのミーティングを重ねていったわけですが、関与していた多くの関係者は最終的に、「じゃあ、次は何をしたらいいの」と意欲的に考え方を变えてくれたのです。これは、素晴らしいレガシーでもあり、まだそのような姿勢は残っています。どうすれば実現できるか、いままでにないようなことをするにはどうしたらいいのか、という視点を持つようになったことが成果でもあったと思っています。

### 【ルース・マッケンジー】

もう一度申し上げますが、2年がかりだったわけです。そして一番反対していたような人達が、お金を出してくれるところまで至ったのです。最後にゴーサインをもらったときには、市から文化の予算ではなくマーケティングの予算をもらいました。ロンドンをPRする上で絶好のチャンスであり、マーケティングの予算をここにすぎ込んだことは大変よかったと思います。

### 【吉本】

ありがとうございました。今日の話の中で、なかなか伝えきれなかったことがあると思いますので、最後に私から少しだけ補足をしたいと思います。

今回のこのフォーラムは、オリンピックが文化にとっても非常に重要な催しである、あるいは文化にとって大きなチャンスであるということをぜひ多くの方にお伝えしたいということで、アーツカウンシル東京とブリティッシュ・カウンシルさんの主催で実現したものです。

なぜアートが重要か。オリンピックは自分達に関係ないのだという人がたくさんいる、オリンピック競技のチケットを買っているのはごく一部の人達です。でも、文化プログラムを実施することによって、全ての人がオリンピックというものが自分にとって関係があるものになっていく。あるいは、オリンピック競技は、ロンドンや東京など主催都市で開かれて、地方都市は全然関係ない。「あれは東京のことでしょう」となるわけですね。でも、ロンドンのように、全国でオリンピックの文化プログラムが展開されれば、地域でオリンピックをきっかけにして何か新しいことを始められる。あるいは、それが観光に結びつけば、東京にオリンピックを見に来た人を地方に招いて、独自の文化を見ていただけます。文化を考えることによって、オリンピックというひとつの大きな催し、プロジェクトが非常に大きな、幅広いものになっていくということをロンドンの事例から私は学びました。

会場にいらっしゃる出席者の方々のお名前を拝見しますと、本当にいろいろな立場の方がいらっしゃいます。もちろん文化庁の方、東京都の方、文化関係者の方もいますし、企業の方もいらっしゃれば、あるいはアーティストの方もいらっしゃるようですし、当然、報道関係の方も大勢いらっしゃると思います。私は、アーツカウンシル東京とブリティッシュ・カウンシルさんによって実現した本日の催しに参集した方々から、文化プログラムをスタートにしたいと考えています。

2020年までまだ6年半あります。招致が決定したときはすごく盛り上がりましたが、その後、必ずネガティブな声も出てくると思います。いま、東京は少し落ちついていますが、「何でオリンピックにこんなお金を使うのか」という話は必ず来ると思います。そういう山谷を乗り越えながら、2020年を素晴らしい年にするために、アーツカウンシル東京とブリティッシュ・カウンシルさんはまたこういう催しを行ってくださると思いますし、今日お招きした3人の方々初め、ロンドンのオリンピックの文化プログラムにかかわった方は、必ずや東京にご協力してくださると思いますので、会場にいらっしゃる皆さんも、それぞれの立場で2020年に向けて文化をぜひ盛り上げていただけたらなと思います。

最後に、3人の方々から、会場にいらっしゃる方々に、短くメッセージを頂戴して終わりにしたいと思います。

#### **【ルース・マッケンジー】**

最初の仕事は夢を見ることです。本当に不可能と思えるようなものも夢に描いてください。時間が十分あるわけですから、できるだけ大きな夢を描いてみてください。そして、よい夢であればあるほど、より素晴らしい文化プランができ上がっていくはずです。夢を見た後は、今度は夢の実現に向かうときです。

#### **【ジャスティーン・サイモンズ】**

夢を見た後、いろいろな障害も出てくると思いますが、それも楽しんでください。きっとたくさん障害は出てきますが、忍耐強く、夢を見失うことなく、その障害を一つ一つクリアしていきましょう。

#### **【モイラ・シンクレア】**

アーティスト以外の方々に申し上げたいと思います。できる限り早くエゴは捨ててください。そして、ぜひパートナーシップを組んで、ひとつのビジョンに向かって行ってください。達成するためお互いの力が必要です。

#### **【吉本】**

ありがとうございました。我々をととても勇気づけてくださるメッセージを頂戴しました。

このたび、英国からお越しいただいたゲストの皆さんには、本当にハードなスケジュールをこなしていただきました。最後に、皆さんから大きな拍手をお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。



ブリティッシュ・カウンシル駐日代表

### ジェフ・ストリーター

皆様、こんにちは。本日は雪の中、こちらにお集まりいただき、ありがとうございます。非常に興味深いお話が聞けたのではないかと思います。カルチュラル・オリンピアドの実現については、彼女達が知らないことはありません。今日皆さんは、一度で全てのことが聞けるとても貴重な経験をされたのです。

昨日のことですが、なぜ英国はそんなに東京のオリンピックのことを気にしているのか、なぜこんなイベントをしているのか、ブリティッシュ・カウンシルがなぜ関わっているのかと聞かれました。これについては非常に明快なメッセージがあります。私達は、オリンピックのカルチュラル・オリンピアドの対話というのが、私達日英の文化的な関係にはとても重要だと思っています。この関係は400年前に始まりました。徳川家康がジェームズ国王に、日英の間には距離があるが友情関係はこの2つの島国の間で存在することは可能だ、と言っていたその精神が400年も残っています。そして、150年前、ロンドンのメトロがつくられているころ長州の5人組が日本を離れてロンドンで勉強し、日本に戻って、明治時代の産業の発展に貢献したという経緯もあります。

このような日英の関係があるので、オリンピックの期間というのは、私達2か国の関係にとっても重要な期間であると考えています。2012年から2020年までの期間は、文化的、そしてさらに幅広い観点から日英関係にとって重要だと思っています。

いろいろな学びが2012年のオリンピックでありましたので、それをぜひ皆さんと共有して、我々の過去から学んで、さらに素晴らしいものを2020年に実現していただきたいという思いを持っています。3人のゲストからは、いろいろなメッセージを受け取っていただきたいと思います。勇気を持って夢を見るということがそのうちの1つでしょう。

ぜひ、今日始まったこの対話を続け、これからの期間、ともに探究をしていきたいと思っています。とくに2012年で重要な役割を担った障害のあるアーティストをサポートする「アンリミテッド(Unlimited)」プログラムはその1つで、2016年のリオデジャネイロに続き、2020年にも続けていけるよう、ブリティッシュ・カウンシルとしてもお手伝いができればと思っています。

東京というのは、世界の中で素晴らしい都市の1つです。日本のアート、芸術文化には、英国も含めて世界から多大な関心が集まっています。2020年のオリンピック文化プログラムは、こうしたことから非常に特別なものになると確信しています。皆さんがこれから作り上げていくビジョンというのはまさに限界がない(unlimited)のであり、志に支えられたインスピレーションに満ちて、日本が生み出す他のもののように美しいものを成していくことでしょう。

ロンドン、英国でのプログラムと同じように、全員に開かれたものであるということも、私は期待しています。達成するためには大きな強い意思が必要でしょう。でも、そのために英国はサポートをして

いきたいと思います。皆さんでしたら、東京のため、日本のため、そして全世界のために素晴らしいものが築けるだろうと信じております。ありがとうございました。

---

編集     アーツカウンシル東京   <http://www.artscouncil-tokyo.jp/>

発行     平成 27（2015）年 1 月 29 日

---

\* 登壇者の所属・役職は開催当時のものです。

\* 全て敬称略としています。